

(表 2-8-5-4) 排世介護拒否の解決に役立った情報の組み合わせパターンと解決方法の関連

区分	code	解決方法	情報の組み合わせパターン																
			パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6	パターン7	パターン8	パターン9	パターン10	パターン11	パターン12	パターン13	パターン14	パターン15	パターン16	パターン17
声かけの工夫	101	トイの置換え	1,256	256	145	94	86	67	67	55	55	40	37	32	31	23	10	10	
	102	声の強弱	64	21	69	137	70	95	02	39	117	73	77	58	27	80	8.0	0.1	
	103	トイに誘う	29	19	13	30	31	02	00	247	03	42	02	00	00	00	4.4	9.9	
	104	排世パターンに応じ	52	13	53	07	13	39	168	11.4	109	4.6	6.5	6.8	8.2	4.5	10.2	10.2	
	105	本人だけに声かけ	14.4	6.2	12.0	7.8	4.1	17.3	38.9	4.9	17.7	12.8	35.9	20.1	11.9	7.3	13.7	13.7	
	106	時間を過ぎ繰り返す	6.5	7.1	7.2	6.8	9.4	6.1	3.3	2.9	6.6	3.2	3.0	4.0	11.6	7.7	0.0	10.1	
	107	衛生・後継に関する説明	0.2	0.0	0.0	0.9	1.9	0.1	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
	108	衛生・後継に関する説明	1.0	0.8	0.0	0.2	1.8	0.8	1.1	3.6	0.0	0.2	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	
	109	家族からの誘導	0.2	0.1	0.0	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	110	全員の声かけ	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	111	職員と一様にトイへ	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	112	好きな話題で声かけ	12.3	18.8	17.9	26.3	13.2	18.4	4.5	3.1	3.6	15.6	0.7	1.9	3.9	10.1	0.3	0.3	
	113	絵巻のため	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	114	衛生状態の確認	0.2	0.2	0.0	0.1	1.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	115	笑顔でやさしく	0.3	0.3	1.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	116	笑顔でやさしく	0.3	0.3	1.3	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	117	その他	0.7	0.4	1.2	3.8	0.6	0.2	0.0	0.2	0.5	0.1	0.0	2.1	1.2	0.1	0.0	0.0	
	介助者の工夫	201	トイの時の下着交換	72	46	51	60	74	50	157	107	27	26	33	214	21.4	9.4	0.5	0.5
		202	事前に確認	41	18	43	28	79	48	27	39	54	0.1	6.9	3.6	4.5	4.7	9.7	9.7
203		慣習への流れ	85	39	97	5.8	5.3	7.7	8.9	22.5	11.2	6.8	12.0	6.8	5.3	17.2	21.9	9.8	
204		交換後の処理をすばやく	50	53	38	3.8	3.8	4.7	2.8	7.4	2.7	6.2	8.3	5.2	0.1	0.3	0.0	0.0	
205		説明し、自分で	0.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
206		すばやく	0.2	0.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
207		室温、毛布等の工夫	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
208		好きな話題で会話しながら	0.8	0.4	2.0	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	
209		洗濯の機め	0.1	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
210		洗濯の機め	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
環境調整	301	種類異なる職員が	0.2	0.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	302	ケア方法の統一	13.6	35.2	12.8	6.8	15.1	18.2	7.7	7.7	0.3	0.9	4.6	1.6	6.7	15.8	15.5	15.5	
	303	介助者の配置	2.1	4.6	0.9	1.0	4.0	1.2	1.0	0.4	0.0	0.3	0.1	5.2	0.6	0.3	8.4	0.4	
	330	その他	0.6	1.2	0.7	0.0	3.7	0.1	0.2	0.0	0.1	0.0	0.4	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
	401	安心できる場所	0.2	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	405	ベッド、下着の保管方法	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	490	その他	0.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	503	医師からの指示	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	502	最後の生命を惜まず	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
	590	その他	0.3	0.3	0.0	1.1	0.0	0.1	0.8	0.0	1.4	0.0	0.1	0.1	0.0	0.4	0.0	0.0	

(注) 滞在クラス所属率率による集計

(表 2-8-6-1) 絶対にやってはいけない対応

	有効回答数	放っておく	無理にトイレに連れて行く	無理やり交換する	声かけせず無言で行う	何度もしつこく声をかける	臭い、汚いからなどの声かけ	その他
実数	286	242	226	237	247	215	230	42
パーセント	100.0	84.6	79.0	82.9	86.4	75.2	80.4	14.7

8. 排泄誘導拒否への成功事例調査

1) 回答者属性

本調査の回答 270 件における回答者の年齢、性別、職名、役職、資格、所属事業種、勤続年数、総介護経験年数について割合を算出した。

(1) 年齢

有効回答 265 件における回答者の平均年齢は、41.6 歳 (SD13.1 歳) で最少年齢が 19 歳、最高年齢が 89 歳であった。(表 2-9-1-1 参照)

(2) 性別割合

有効回答 268 件中、回答者の性別割合は男性が 77 件 (28.7%)、女性が 191 件 (71.3%) と女性の割合が多かった。(表 2-9-1-2 参照)

(3) 職名の割合

有効回答 250 件中、回答者の職名の割合はケアワーカーが 107 件 (42.8%)、ケアマネージャーが 71 件 (28.4%)、看護師が 13 件 (5.2%)、相談員が 6 件 (2.4%) となっている。(表 2-9-1-3 参照)

(4) 役職の割合

有効回答 254 件中、回答者の役職の割合は、主任・リーダーが 77 件 (30.3%)、管理者が 74 件 (29.1%)、施設長が 10 件 (3.9%)、理事長が 1 件 (0.4%) で、95 件 (37.4%) が役職なしであった。(表 2-9-1-4 参照)

(5) 資格の所有割合

有効回答 262 件中、回答者の資格の所有割合は、介護福祉士が 166 件 (63.4%)、ヘルパーが 98 件 (37.4%)、ケアマネージャーが 89 件 (34.0%)、看護師 (准看護師) が 20 件 (7.6%)、社会福祉士が 11 件 (4.2%) であった。(表 2-9-1-5 参照)

(6) 所属事業種の割合

有効回答 265 件中、回答者の所属事業種は認知症対応型共同生活介護事業が 256 件 (96.6%)、小規模多機能型通所介護事業が 5 件 (1.9%)、介護老人福祉施設 (ユニット型) が 4 件 (1.5%)、介護老人福祉施設が 2 件 (0.8%) であった。(表 2-9-1-6 参照)

(7) 所属事業所での勤続年数

有効回答 268 件中、回答者の所属事業所での平均勤続年数は、3.9 年 (SD2.8 年) で最少が 0.1 年、最高が 19.7 年であった。(表 2-9-1-7 参照)

(8) 総介護経験年数

有効回答 268 件中、回答者の総介護経験の平均年数は、8.4 年 (SD5.8 年) で最少が 0.3 年、最高が 47.0 年であった。(表 2-9-1-8 参照)

2) 排泄誘導拒否の解決経験

本調査に回答を得た 270 件における排泄誘導拒否の解決経験、解決した高齢者に

関する年齢、性別、認知症の原因疾患、身体機能の障害とADL、認知症の重症度、身体障害の重症度について割合を算出するとともに、介助や重症度などによるパターン化を行った。

(1) 解決経験の有無

有効回答 268 件中、排泄誘導拒否で解決経験があるのは 238 件 (88.8%) であった。(表 2-9-2-1 参照)

(2) 高齢者の状態

① 年齢

解決経験がある 238 件のうち有効回答 221 件における高齢者の平均年齢は、84.3 歳 (SD6.2 歳) で最少年齢が 66 歳、最高年齢が 103 歳であった。その分布をみると、80 歳～84 歳が 72 件 (32.6%) で最も多い。(表 2-9-2-2 参照)

② 性別

性別割合は、有効回答 235 件中、男性が 44 件 (18.7%)、女性が 191 件 (81.3%) と女性が多い。(表 2-9-2-3 参照)

③ 認知症の原因疾患

認知症の原因疾患は、有効回答 210 件中、アルツハイマー型が 117 件 (55.7%)、脳血管疾患型が 60 件 (28.6%)、前頭側頭型が 3 件 (1.4%)、混合が 10 件 (4.8%) であった。(表 2-9-2-4 参照)

④ 身体機能の障害とADL

【機能障害部位】

機能障害部位は、有効回答 238 件中、下肢が 60 件 (25.2%)、体幹が 5 件 (2.1%)、上肢が 2 件 (0.8%)、首が 1 件 (0.4%) であり、残りの 170 件 (71.4%) が機能障害なし (=無回答) であった。(表 2-9-2-5 参照)

【食事介助】

食事介助は、有効回答 227 件中、自立が 167 件 (73.6%)、一部介助が 56 件 (24.7%)、全介助が 4 件 (1.8%) であった。(表 2-9-2-6 参照)

【移動】

移動は、有効回答 192 件中、短距離歩行自立が 116 件 (60.4%)、長距離歩行自立が 44 件 (22.9%)、杖自立が 29 件 (15.1%) であった。(表 2-9-2-7 参照)

【排泄】

排泄は、有効回答 206 件中、身体介助必要が 127 件 (61.7%)、身体介助必要なしが 79 件 (38.3%) であった。(表 2-9-2-8 参照)

【入浴】

入浴は、有効回答 229 件中、全介助が 50 件 (21.8%)、洗身洗髪介助が 95 件 (41.5%)、移動介助が 40 件 (17.5%)、その他一部介助が 44 件 (19.2%) であった。(表 2-9-2-9 参照)

⑤ 認知症の重症度

認知症の重症度は、有効回答 231 件中、ランクⅠが 13 件 (5.6%)、ランクⅡが 32 件 (13.9%)、ランクⅢが 112 件 (48.5%)、ランクⅣが 66 件 (28.6%)、ランクⅤが 8 件 (3.5%) であった。(表 2-9-2-10 参照)

⑥ 身体障害の重症度

身体障害の重症度は、有効回答 223 件中、J ランクが 16 件 (7.2%)、A ランクが 163 件 (73.1%)、B ランクが 41 件 (18.4%)、C ランクが 3 件 (1.3%) であった。(表 2-9-2-11 参照)

⑦ 高齢者パターン

高齢者の状態を総合的にみてパターン化するために、性別、排泄介助、認知症の重症度、身体障害の重症度の 4 項目を対象にして潜在クラス分析(注 1)を行った結果 2 パターンが可能となった。

第 1 パターンは、排泄介助で身体介助必要なし (60.5%) が多く、身体障害の重症度で A ランク (86.5%) と J ランク (12.8%) に集中し、認知症の重症度でランクⅢ (53.8%) が多いことから、これを「自立、軽中程度重症度」と解釈した。このパターンには、有効回答 164 件のうち 108 件 (65.9%) が該当する。

第 2 パターンは、排泄介助で身体介助必要 (97.0%) が多く、身体障害の重症度で B ランク (48.8%) と A ランク (45.6%) が多く、認知症の重症度でランクⅣ (49.4%) とランクⅢ (31.9%) が多いことから、これを「介助、中高程度重症度」と解釈した。このパターンには 56 件 (34.1%) が該当する。(表 2-9-2-12 参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表 2-9-2-13 参照)

(注 1) 潜在クラス分析について

潜在クラス分析は、全体集団から異質な部分集団の混在を識別する分析モデルである。

高齢者全体集団でみたとき、性別、排泄介助、認知症の重症度、身体障害の重症度の 4 項目間に関連があれば異質な部分集団が混在していると考えて、項目間の関連がない部分集団(これをクラスと呼ぶ)を識別する。具体的には、同一クラス内では対象 4 項目間の関連がなくなるように識別し、項目間の関連がなくなることを局所独立と呼ぶ。

クラス数は任意であるが、多くすれば局所独立が高まる反面モデルとしての適切さが損なわれる。適切なモデル(クラス数)を評価する指標として A I C や B I C などの情報量規準が用いられ、その数値が低い方が良いとされている。なおここで示すクラス毎の事例件数は確率的に求めた件数である(注 2 参照)。分析ソフトは“LatentGOLD”を用いた。

3) 解決前と解決後の変化

排泄誘導拒否で解決経験がある 238 件における、解決前の状況と解決後の状況について割合を算出するとともに、解決前後の関連を分析し、高齢者パターンによる差異も確認した。

(1) 解決前の状況

排泄誘導拒否が解決される前の状況としては、有効回答 238 件中、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」が 132 件 (55.5%)、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」が 105 件 (44.1%)、「強く拒否し、強い口調で怒った」が 100 件 (42.0%)、「色々と理由をつけて、拒否した」が 73 件 (30.7%)、「トイレまでは行くがズボンを下げなかった」が 52 件 (21.8%) であった。(表 2-9-3-1 参照)

(2) 解決後の状況

排泄誘導拒否が解決された後の状況としては、有効回答 238 件中、「最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった」と「トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った」が各 98 件 (41.2%)、「拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた」が 56 件 (23.5%)、「トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった」が 35 件 (14.7%)、「タンスの中に隠していた使用済みパッドが少なくなった」が 21 件 (8.8%) であった。(表 2-9-3-2 参照)

(3) 解決前後の関連

解決前後それぞれの項目重複による影響排除のために、パターン化を経て分析することにした。

① 解決前のパターン

パターン化に用いた方法は潜在クラス分析である。

解決前は 6 パターンであり、第 1 は、「強く拒否し、強い口調で怒った」(99.1%)に加えて、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(54.2%)、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」(43.5%)などを伴っている。これに該当する事例が 43 件 (29.9%)であり、「不衛生だったり、定時誘導しても、強く拒否し怒った」パターンと表示する。

第 2 は、「色々と理由をつけて、拒否した」(98.5%)に加えて、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(55.8%)、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」(33.6%)などを多少伴っている。これに該当する事例が 33 件 (22.9%)であり、「不衛生だったり、定時誘導しても、色々理由をつけて拒否した」パターンと表示する。

第 3 は、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(99.6%)にほぼ集中している。これに該当する事例が 20 件 (13.9%)であり、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」パターンと表示する。

第4は、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」(99.5%)に加えて、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(10.5%)を多少伴っている。これに該当する事例が18件(12.5%)であり、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」パターンと表示する。

第5は、「強く拒否し、強い口調で怒った」(98.9%)、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」(92.0%)、「色々理由をつけて、拒否した」(88.7%)、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(76.4%)、「トイレまでは行くがズボンを下げなかった」(73.3%)と実に多様である。これに該当する事例が17件(11.8%)であり、「頑固に拒否」パターンと表示する。

第6は、「トイレまでは行くがズボンを下げなかった」(97.2%)に加えて、「トイレ誘導を定時で行うが拒否された」(49.0%)、「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」(25.9%)などを伴っている。これに該当する事例が12件(8.3%)であり、「定時誘導を拒否したり、トイレまでは行くがズボンを下げなかった」パターンと表示する。(表2-9-3-3参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-9-3-4参照)

② 解決後のパターン

解決後は4パターンであり、第1は、「最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった」(99.6%)に加えて、「トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った」(39.5%)などを伴っている。これに該当する事例が61件(42.4%)であり、「誘導に応じる回数が増えたり、最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった」パターンと表示する。

第2は、「トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った」(99.7%)に加えて、「タンスの中に隠していた使用済みパッドが少なくなった」(12.0%)などを多少伴っている。これに該当する事例が44件(30.6%)であり、「トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った」パターンと表示する。

第3は、「拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた」(99.2%)にほぼ集中している。これに該当する事例が28件(19.4%)であり、「拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた」パターンと表示する。

第4は、「トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった」(97.6%)にほぼ集中している。これに該当する事例が11件(7.6%)であり、「トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった」パターンと表示する。(表2-9-3-5参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-9-3-6参照)

③ 解決前後のパターンの関連

各パターンへの帰属確率の相関によって解決前後の関連分析をした。

相関は正負両方表れるが、ここでは「解決前どうであったのが解決後どうなった」という関連をみる観点から正相関にのみ着目する。そしてまず全体的な傾向をみた上で、高齢者パターンによる差異を確認する。

まず全体では2つの変化傾向がみられる。1つめは、解決前パターン4（トイレ誘導を定時で行うが拒否された）から、解決後パターン2（トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った）へと変化する傾向であり、有意水準5%で相関が認められる。

2つめは、解決前パターン1（不衛生だったり、定時誘導しても、強く拒否し怒った）から、解決後パターン1（誘導に応じる回数が増えたり、最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった）へと変化する傾向であり、有意水準5%で相関が認められる。（表2-9-3-7参照）

次に高齢者パターン1（自立、軽中程度重症度）に限定してみると、上記の全体的傾向と異なった次の傾向がみられた。解決前パターン6（定時誘導を拒否したり、トイレまでは行くがズボンを下げなかった）から、解決後パターン2（トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った）へと変化する傾向であり、有意水準1%で相関が認められる。（表2-9-3-8参照）

高齢者パターン2（介助、中高程度重症度）に限定してみると、ここでも上記と異なった変化傾向がみられた。解決前パターン2（不衛生だったり、定時誘導しても、色々理由をつけて拒否した）から、解決後パターン3（拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた）へと変化する傾向であり、有意水準5%で相関が認められる。（表2-9-3-9参照）

このように、解決前後の変化は高齢者パターンによって異なった変化傾向を示している。

（4）高齢者パターン別にみた解決前後の状況

そこで高齢者パターン別にみた解決前後の状況を分析した（注2）。

解決前の状況は、高齢者パターン1（自立、軽中程度重症度）では「リハビリパンツ、パッドが尿や便で汚染され不衛生であった」（58.5%）と「色々理由をつけて、拒否した」（38.3%）が高齢者パターン2のそれら（50.0%と28.0%）を上回っている。（表2-9-3-10参照）

解決後の状況についてはそれほど顕著な差はみられない。（表2-9-3-11参照）

（注2）潜在クラスとの関連分析には帰属確率を用いる

潜在クラスは各クラスへの帰属関係を確率的に表すことから、クラスと他の項目との関連分析に際しても、その確率で表すのが適切である。

例えば、ある事例の帰属確率が、クラス1に対して0.97、クラス2に対して0.03、（全クラスへの帰属確率合計は1.00である）となっている場合、関連分析する項目に対しても同じ確率を適用する。

4) 排泄誘導拒否の解決方法

排泄誘導拒否で解決経験がある 238 件における、解決方法の割合を算出するとともに、解決方法をパターン化して、どのパターンがどのような結果に貢献するのか、さらにその貢献は高齢者パターンでどう異なるのか分析した。

(1) 解決方法の概況

排泄誘導拒否を解決する時に行った方法を具体的に記入してもらい、その内容を検討評価して 43 分類した。分類結果は、誘導時間に関するものが 2 分類、誘導の工夫に関するものが 16 分類、介助の工夫に関するものが 9 分類、コミュニケーションに関するものが 13 分類、その他が 3 分類であった。

有効回答 237 件のなかで多くあがったものは、「排泄パターンに応じ」が 177 件 (74.7%)、「本人の行動・状態に応じて」が 149 件 (62.9%)、「移動時」が 133 件 (56.1%)、「会話をしながら」が 123 件 (51.9%)、「賞賛、ほめる」が 117 件 (49.4%)、「定時声かけ」が 114 件 (48.1%)、「トイレという言葉を使用しない」が 97 件 (40.9%)、「すばやく」が 90 件 (38.0%)、「本人だけに」が 79 件 (33.3%)、「衛生・疾病の説明」が 51 件 (21.5%)、「パッド交換は職員で」が 49 件 (20.7%)、「パッドをすばやく片付ける」が 46 件 (19.4%)、「他者と一緒に」が 43 件 (18.1%)、「おしりの状態をみる」が 39 件 (16.5%)、「職員と一緒に」が 34 件 (14.3%)、「トイレ以外の理由で誘導」が 32 件 (13.5%)、「慣れた言葉」が 26 件 (11.0%) などであり、1 事例あたり平均 6.4 項目であった。(表 2-9-4-1 参照)

(2) 解決方法の組み合わせパターン

43 分類のなかから 1 事例平均 6.4 の方法で構成されているのを実際の組み合わせに高い確率で近似するパターンを得るために潜在クラス分析を応用した(注3)。

その結果 16 の組み合わせパターンを得た。

第 1 パターンは平均 4.1 項目と最少の組み合わせであり、「本人の行動・状態に応じて」(99.9%)と「排泄パターンに応じ」(84.2%)を共通ベースとして、「会話をしながら」(43.3%)、「移動時」(39.0%)、「トイレという言葉を使用しない」(32.8%)などで構成されている。第 1 パターンの該当事例は 33 件 (13.7%)である。

第 2 パターンは平均 5.0 項目の組み合わせであり、「賞賛、ほめる」(99.8%)と「排泄パターンに応じ」(93.1%)を共通ベースとして、「本人の行動・状態に応じて」(65.9%)、「移動時」(53.2%)などで構成されている。第 2 パターンに該当する事例は 28 件 (9.7%)である。

第 3 パターンは平均 5.0 項目の組み合わせであり、「トイレという言葉を使用しない」(99.6%)を共通ベースとして、「排泄パターンに応じ」(57.5%)、「定時声かけ」(48.5%)、「会話をしながら」(43.6%)、「本人だけに」(41.4%)、「移動時」(40.4%)などで構成されている。第 3 パターンに該当する事例は 22 件 (9.3%)である。

第4パターンは平均5.5項目の組み合わせであり、「移動時」(91.7%)と「すばやく」(89.7%)を共通ベースとして、「定時声かけ」(67.3%)、「本人の行動・状態に応じて」(55.2%)、「会話をしながら」(38.3%)、「排泄パターンに応じ」(32.0%)、「パッド交換は職員で」(32.0%)などで構成されている。第4パターンに該当する事例は18件(7.6%)である。

第5パターンは平均8.0項目の組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.8%)、「会話をしながら」(99.6%)、「すばやく」(99.7%)、「賞賛、ほめる」(90.4%)の4項目を共通ベースとして、「本人の行動・状態に応じて」(73.0%)、「移動時」(71.3%)、「定時声かけ」(55.7%)などで構成されている。第5パターンに該当する事例は16件(6.8%)である。

第6パターンは平均5.6項目の組み合わせであり、「本人だけに」(92.0%)を共通ベースとして、「排泄パターンに応じ」(74.7%)、「移動時」(60.7%)、「会話をしながら」(58.5%)、「本人の行動・状態に応じて」(46.6%)、「他者と一緒に」(43.6%)などで構成されている。第6パターンに該当する事例は16件(6.8%)である。

第7パターンは平均6.5項目の組み合わせであり、「賞賛、ほめる」(99.8%)と「定時声かけ」(99.7%)を共通ベースとして、「本人だけに」(71.6%)、「本人の行動・状態に応じて」(56.3%)、「会話をしながら」(50.6%)、「移動時」(50.4%)などで構成されている。第7パターンに該当する事例は16件(6.8%)である。

第8パターンは平均11.6項目と最多の組み合わせであり、「パッドをすばやく片付ける」(99.5%)、「会話をしながら」(92.0%)、「移動時」(84.6%)、「本人の行動・状態に応じて」(84.5%)、「トイレという言葉を使用しない」(84.3%)の5項目を共通ベースとして、「賞賛、ほめる」(69.7%)、「パッド交換は職員で」(69.2%)、「すばやく」(62.8%)、「排泄パターンに応じ」(62.0%)、「トイレ以外の理由で誘導」(60.2%)などで構成されている。第8パターンに該当する事例は13件(5.5%)である。

第9パターンは平均10.8項目と多様な組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.9%)、「定時声かけ」(84.0%)、「本人の行動・状態に応じて」(99.7%)、「会話をしながら」(83.8%)、「本人だけに」(87.7%)、「トイレという言葉を使用しない」(89.1%)、「移動時」(99.3%)、「すばやく」(87.8%)の8項目を共通ベースとして、「賞賛、ほめる」(59.0%)などで構成されている。第9パターンに該当する事例は13件(5.5%)である。

第10パターンは平均6.6項目の組み合わせであり、「定時声かけ」(99.7%)、「排泄パターンに応じ」(83.6%)、「本人の行動・状態に応じて」(82.7%)、「おしりの状態をみる」(84.0%)の4項目を共通ベースとして、「賞賛、ほめる」(66.9%)、「移動時」(50.8%)などで構成される。第10パターンに該当する事例は13件(5.5%)である。

第 11 パターンは平均 5.9 項目の組み合わせであり、「おしりの状態をみる」(89.1%)と「トイレ以外の理由で誘導」(76.1%)を共通ベースとして、「排泄パターンに応じ」(68.8%)、「本人の行動・状態に応じて」(52.1%)、「トイレという言葉を使用しない」(59.3%)、「衛生・疾病の説明」(57.0%)などで構成される。第 11 パターンに該当する事例は 10 件 (4.2%) である。

第 12 パターンは平均 4.6 項目の組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.8%)と「定時声かけ」(76.2%)を共通ベースとして、「賞賛、ほめる」(56.7%)、「他者と一緒に」(53.4%)、「すばやく」(42.5%)などで構成されている。第 12 パターンに該当する事例は 9 件 (3.8%) である。

第 13 パターンは平均 6.7 項目の組み合わせであり、「会話をしながら」(99.6%)と「賞賛、ほめる」(99.6%)を共通ベースとして、「移動時」(74.6%)、「トイレという言葉を使用しない」(48.5%)、「極力本人で、部分介助」(49.1%)、「衛生・疾病の説明」(48.1%)などで構成されている。第 13 パターンに該当する事例は 8 件 (3.4%) である。

第 14 パターンは平均 6.3 項目の組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.8%)を共通ベースとして、「移動時」(60.4%)、「衛生・疾病の説明」(50.0%)、「信頼関係の構築」(50.0%)、「本人の行動・状態に応じて」(48.1%)、「慣れた言葉」(46.5%)などで構成されている。第 14 パターンに該当する事例は 8 件 (3.4%) である。

第 15 パターンは平均 9.1 項目の組み合わせであり、「パッドをすばやく片付ける」(99.1%)、「パッド交換は職員で」(99.3%)、「本人だけに」(99.4%)、「排泄パターンに応じ」(85.6%)の 4 項目を共通ベースとして、「移動時」(71.3%)、「トイレ備品の使用について声かけ」(70.7%)、「衛生・疾病の説明」(56.8%)、「お金の心配払拭」(56.5%)などで構成されている。第 15 パターンに該当する事例は 7 件 (3.0%) である。

第 16 パターンは平均 8.8 項目の組み合わせであり、「排泄パターンに応じ」(99.7%)、「本人の行動・状態に応じて」(99.5%)、「定時声かけ」(82.8%)、「衛生・疾病の説明」(99.2%)、「パッド交換は職員で」(99.1%)、「賞賛、ほめる」(82.5%)、「パッドをすばやく片付ける」(82.1%)の 7 項目を共通ベースとして、「移動時」(50.0%)、「会話をしながら」(49.8%)などで構成されている。第 16 パターンに該当する事例は 6 件 (2.5%) である。(表 2-9-4-2 参照) (潜在クラスモデルの評価経緯は表 2-9-4-3 参照)

(注3) 組み合わせパターンへの潜在クラス分析の応用

潜在クラス分析は(注1)に示したような局所独立を仮定して異質な部分集団を識別し、モデルの適切さを情報量規準で評価するのが一般的である。ここでは組み合わせパターンを一定水準以上に明確にすることを優先して、情報量規準によるモデル評価をある程度逸脱するのにも良しとした。しかしながらモデルの極度な不適切を回避するために、“LatentGold”が算出する“Classification Statistics”(分類精度情報)の各指標を総合的に評価して局所独立の追及を優先したモデルを定めた。

ここで表す各パターンの該当件数も確率から整数換算した結果である。

(3) 解決方法の組み合わせパターンの貢献

このような解決方法がどんな結果に貢献するのか、16の組み合わせパターンと解決後のパターンの相関を分析した後、参考までに個別状況との関連を確認する。

まず、解決方法の組み合わせ16パターンと解決後の4パターンの帰属確率による相関分析を行うと、5通りの相関が認められる。

1つめは、解決方法パターン2と解決後パターン4の相関が有意水準1%で認められる。解決方法パターン2は、「賞賛、ほめる」と「排泄パターンに応じ」を共通ベースとして、「本人の行動・状態に応じて」、「移動時」などで構成された平均5.0項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン4の“トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった”という結果に貢献している傾向が読み取れる。

2つめは、解決方法パターン13と解決後パターン2の相関が有意水準1%で認められる。解決方法パターン13は、「会話をしながら」と「賞賛、ほめる」を共通ベースとして、「移動時」、「トイレという言葉を使用しない」、「極力本人で、部分介助」、「衛生・疾病の説明」などで構成された平均6.7項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン2の“トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った”に貢献している傾向が読み取れる。

3つめは、解決方法パターン8と解決後パターン3の相関が有意水準5%で認められる。解決方法パターン8は、「パッドをすばやく片付ける」、「会話をしながら」、「移動時」、「本人の行動・状態に応じて」、「トイレという言葉を使用しない」の5項目を共通ベースとして、「賞賛、ほめる」他で構成された平均11.6項目と最多の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン3の“拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた”に貢献している傾向が読み取れる。

4つめは、解決方法パターン14と解決後パターン1の相関が有意水準5%で認められる。解決方法パターン14は、「排泄パターンに応じ」を共通ベースとして、「移動時」、「衛生・疾病の説明」、「信頼関係の構築」、「本人の行動・状態に応じて」、「慣れた言葉」などで構成された平均6.3項目の組み合わせ”であり、これ

らの方法が、解決後パターン 1 の“誘導に応じる回数が増えたり、最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった”に貢献している傾向が読み取れる。

5 つめは、解決方法パターン 5 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 5% で認められる。解決方法パターン 5 は、“排泄パターンに応じ”、“会話をしながら”、“すばやく”、“賞賛、ほめる”の 4 項目を共通ベースとして、“本人の行動・状態に応じて”、“移動時”、“定時声かけ”などで構成された平均 8.0 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 3 の“拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-9-4-4 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によっても、上記の傾向が確認できる。

解決方法パターン 2 では、解決後に“トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった”が 23.4% と相対的に多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 13 では、解決後に“トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った”が 83.3% と多くなっており、これらは解決後パターン 2 の主要項目である。

解決方法パターン 8 では、解決後に“拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた”が 56.0% と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

解決方法パターン 14 では、解決後に“最初は軽く拒否するが、その後素直に応じるようになった”が 94.7% と多くなっており、これは解決後パターン 1 の主要項目である。

解決方法パターン 5 では、解決後に“拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた”が 42.9% と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。(表 2-9-4-5 参照)

(4) 高齢者パターン別にみた、解決方法の組み合わせパターンの貢献

次に高齢者パターン 1 (自立、軽中程度重症度) に限定した相関分析を行うと、3 通りの相関が認められる (注 4)。

1 つめは、解決方法パターン 2 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1% で認められる。これは上記の全体的傾向と同様である。

2 つめは、解決方法パターン 13 と解決後パターン 2 の相関が有意水準 1% で認められる。これも上記の全体的傾向と同様である。

3 つめは、解決方法パターン 8 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 1% で認められる。これも上記の全体的傾向と同様で、より強い相関となっている。(表 2-9-4-6 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもこれらの傾向が確認できる。

解決方法パターン 2 では、解決後に“トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった”が 29.1%と相対的に多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。

解決方法パターン 13 では、解決後に“トイレ誘導に応じる回数が増え、失禁も減った”が 100.0%と多くなっており、これは解決後パターン 2 の主要項目である。

解決方法パターン 8 では、解決後に“拒否されることが多いが、渋々行くようになってきた”が 65.7%と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。(表 2-9-4-7 参照)

また高齢者パターン 2 (介助、中高程度重症度) に限定した相関分析を行うと、1 通りの相関が認められる。

解決方法パターン 13 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1%で認められる。解決方法パターン 13 は、“「会話をしながら」と「賞賛、ほめる」を共通ベースとして、「移動時」、「トイレという言葉を使用しない」、「極力本人で、部分介助」、「衛生・疾病の説明」などで構成された平均 6.7 項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン 4 の“トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-9-4-8 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもその傾向が確認できる。

解決方法パターン 13 では、解決後に“トイレ誘導をしなくてもトイレへ行くようになった”が 49.6%と多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。(表 2-9-4-9 参照)

(注 4) 高齢者パターン別分析の配慮

高齢者パターンと解決方法パターンの双方を潜在確率のまま解決後の状況とのクロス集計不能につき、ここでは便宜的に高齢者パターン 1 と 2 を明確に離散した。具体的には、高齢者パターンの潜在確率が大きい方に各事例を定義 (=クラスター化) した上で、解決方法パターンと解決後の状況のクロス集計を行った。このクロス集計でも前記同様に帰属確率を用いた。

5) 排泄誘導拒否の解決に役立った情報

上記の解決方法個々について、役立った情報をあげてもらった。

有効回答延べ 1,420 件の解決方法について、役立った情報の割合を算出するとともに、情報をパターン化して、どの情報パターンがどの解決方法に関連するのか分析した。

(1) 役立った情報の概況

有効回答 1,420 件のなかで多くあがったものは、「スタッフの声かけ内容・見守り方」が 599 件 (42.2%)、「本人の気持ち、意志」が 559 件 (39.4%)、「スタッ

フとの関係」が 333 件 (23.5%)、「気分」が 252 件 (17.7%)、「性格」が 212 件 (14.9%)、「排泄・排尿時間」と「排泄間隔」が 173 件 (12.2%) などであり、ひとつの解決方法当たり平均 2.8 項目あげられた。(表 2-9-5-1 参照)

(2) 役立った情報の組み合わせパターン

ここでも上記の解決方法同様に、実際の組み合わせに高い確率で近似する組み合わせパターンを得るために潜在クラス分析を応用した。

その結果 20 の組み合わせパターンを得た。

第 1 パターンは平均 1.8 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(99.9%) を共通ベースとして、「スタッフとの関係」(24.7%)、「性格」(19.1%) などで構成されている。第 1 パターンの該当方法は延べ 157 件 (11.1%) である。

第 2 パターンは平均 3.2 項目の組み合わせであり、「本人の気持ち、意志」(81.6%) を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(62.4%)、「性格」(53.8%)、「気分」(46.1%)、「スタッフとの関係」(27.3%) などで構成されている。第 2 パターンの該当方法は延べ 140 件 (9.9%) である。

第 3 パターンは平均 1.9 項目の組み合わせであり、「スタッフとの関係」(50.7%)、「他の入居者との関係」(32.1%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(29.1%)、「性格」(29.1%) などで構成されている。第 3 パターンの該当方法は延べ 110 件 (7.7%) である。

第 4 パターンは平均 3.0 項目の組み合わせであり、「誘導の時間帯」(73.7%)、「排泄・排尿時間」(67.2%)、「排泄間隔」(40.4%)、「排泄頻度」(40.0%) などの“排泄行動”を主として構成されている。第 4 パターンの該当方法は延べ 106 件 (7.5%) である。

第 5 パターンは平均 1.7 項目と最少の組み合わせであり、「本人の気持ち、意志」(99.8%) を共通ベースとして、「他の入居者との関係」(12.1%) などで構成されている。第 5 パターンの該当方法は延べ 92 件 (6.5%) である。

第 6 パターンは平均 2.5 項目の組み合わせであり、「気分」(99.6%) を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」(39.3%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(21.7%) などで構成されている。第 6 パターンの該当方法は延べ 90 件 (6.3%) である。

第 7 パターンは平均 3.6 項目の組み合わせであり、「失禁状況」(47.5%)、「排泄状況」(43.0%)、「失禁有無」(40.5%)、「水分状態」(25.7%)、「便の状態」(20.6%)、「尿意・排泄感覚」(29.2%)、「本人の気持ち、意志」(20.2%) などで構成されている。第 7 パターンの該当方法は延べ 86 件 (6.1%) である。

第 8 パターンは平均 3.1 項目の組み合わせであり、「スタッフとの関係」(85.0%) を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(78.4%)、「本人の気持ち、意志」(72.9%) などで構成されている。第 8 パターンの該当方法は延べ 84

件 (5.9%) である。

第 9 パターンは平均 2.1 項目の組み合わせであり、「性格」(30.3%)、「本人の気持ち、意志」(26.9%)、「生活習慣 (ここ数年)」(24.7%)、「排泄に関する生活習慣」(22.4%) などで構成されている。第 9 パターンの該当方法は延べ 84 件 (5.9%) である。

第 10 パターンは平均 3.3 項目の組み合わせであり、「抵抗時の表情」(99.7%) を共通ベースとして、「抵抗時の様子」(57.5%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(35.2%)、「本人の気持ち、意志」(28.0%)、「性格」(22.3%) などで構成されている。第 10 パターンの該当方法は延べ 60 件 (4.2%) である。

第 11 パターンは平均 3.5 項目の組み合わせであり、「排泄間隔」(63.1%)、「本人の気持ち、意志」(44.7%)、「尿意・排泄感覚」(40.9%)、「排泄・排尿時間」(36.9%)、「パッドの必要性」(26.7%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(20.5%) などで構成されている。第 11 パターンの該当方法は延べ 55 件 (3.9%) である。

第 12 パターンは平均 4.0 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(99.0%) と「スタッフとの関係」(97.2%) を共通ベースとして、「気分」(69.8%)、「本人の気持ち、意志」(64.2%) などで構成されている。第 12 パターンの該当方法は延べ 54 件 (3.8%) である。

第 13 パターンは平均 2.8 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(56.0%)、「排泄に関する生活習慣」(38.5%)、「排泄場所」(34.7%)、「本人の気持ち、意志」(29.2%)、「スタッフとの関係」(27.1%) などで構成されている。第 13 パターンの該当方法は延べ 51 件 (3.6%) である。

第 14 パターンは平均 2.8 項目の組み合わせであり、「興味・関心」(99.6%) を共通ベースとして、「気分」(44.3%) と「本人の気持ち、意志」(37.3%) を含めた“心理面”を主として構成されている。第 14 パターンの該当方法は延べ 49 件 (3.5%) である。

第 15 パターンは平均 3.1 項目の組み合わせであり、「排泄間隔」(89.4%)、「排泄頻度」(61.2%)、「排泄・排尿時間」(59.3%) など“排泄行動”を主として構成されている。第 15 パターンの該当方法は延べ 49 件 (3.5%) である。

第 16 パターンは平均 3.7 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(99.7%) と「本人の気持ち、意志」(95.3%) を共通ベースとして、「尿意・排泄感覚」(22.4%)、「生活習慣 (ここ数年)」(22.0%) などで構成されている。第 16 パターンの該当方法は延べ 44 件 (3.1%) である。

第 17 パターンは平均 4.5 項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(93.2%) を共通ベースとして、「排泄間隔」(45.5%)、「排泄・排尿時間」(39.2%)、「排泄頻度」(36.3%)、「スタッフとの関係」(34.4%)、「誘導の時間帯」(28.3%)、「性格」(23.4%) などで構成されている。第 17 パターンの該当方法は延べ 42 件 (3.0%) である。

第 18 パターンは平均 3.6 項目の組み合わせであり、「本人の気持ち、意志」(85.9%) を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(38.0%)、「失禁状況」(37.8%)、「失禁有無」(28.1%) などで構成されている。第 18 パターンの該当方法は延べ 42 件 (3.0%) である。

第 19 パターンは平均 2.6 項目の組み合わせであり、「失禁有無」(34.8%)、「気分」(26.0%)、「認知症の種類」(22.2%)、「排泄状況」(20.1%) などで構成されている。第 19 パターンの該当方法は延べ 18 件 (1.3%) である。

第 20 パターンは平均 7.9 項目と最多の組み合わせであり、「生活歴 (幼少期から)」(79.0%) を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(59.4%)、「スタッフとの関係」(59.3%)、「現病・既往歴」(58.4%) などで構成されている。第 19 パターンの該当方法は延べ 5 件 (0.4%) である。(表 2-9-5-2 参照) (潜在クラスモデルの評価経緯は表 2-9-5-3 参照)

(3) 情報の組み合わせパターンが関連する解決方法

上記の情報組み合わせがどの解決方法に関連するか分析すると次の傾向である。

第 15 パターン(「排泄間隔」、「排泄頻度」、「排泄・排尿時間」など“排泄行動”を主として構成された平均 3.1 項目の組み合わせ) は、「排泄パターンに応じ」が 59.3%、「定時声かけ」が 20.6% と多い。

第 4 パターン(「誘導の時間帯」、「排泄・排尿時間」、「排泄間隔」、「排泄頻度」などの“排泄行動”を主として構成された平均 3.0 項目の組み合わせ) は、「定時声かけ」が 41.7%、「排泄パターンに応じ」が 35.1% と多い。

第 7 パターン(「失禁状況」、「排泄状況」、「失禁有無」、「水分状態」、「便の状態」、「尿意・排泄感覚」、「本人の気持ち、意志」などで構成された平均 3.6 項目の組み合わせ) は、「排泄パターンに応じ」が 40.6% と多い。

第 20 パターン(「生活歴 (幼少期から)」を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「スタッフとの関係」、「現病・既往歴」などで構成された平均 7.9 項目と最多の組み合わせ) は、「信頼関係の構築」が 39.2%、「衛生・疾病の説明」が 19.8%、「本人の行動・状態に応じて」が 19.6%、「外出してから」が 19.5% と多い。

第 11 パターン(「排泄間隔」、「本人の気持ち、意志」、「尿意・排泄感覚」、「排泄・排尿時間」、「パッドの必要性」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などで構成された平均 3.5 項目の組み合わせ) は、「排泄パターンに応じ」が 34.8%、「定時声かけ」が 18.2% と多い。

第 19 パターン(「失禁有無」、「気分」、「認知症の種類」、「排泄状況」などで構成された平均 2.6 項目の組み合わせ) は、「排泄パターンに応じ」が 30.2%、「おしりの状態をみる」が 14.9% と多い。

第 8 パターン(「スタッフとの関係」を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「本人の気持ち、意志」などで構成された平均 3.1 項目の組み

合わせ)は、「移動時」が13.4%、「賞賛、ほめる」が13.2%と多い。

第17パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースとして、「排泄間隔」、「排泄・排尿時間」、「排泄頻度」、「スタッフとの関係」、「誘導の時間帯」などで構成された平均4.5項目の組み合わせ)は、「排泄パターンに応じ」が27.4%と多い。

第14パターン(「興味・関心」を共通ベースとして、「気分」と「本人の気持ち、意志」を含めた“心理面”を主として構成された平均2.8項目の組み合わせ)は、「トイレという言葉を使用しない」が25.5%、「トイレ以外の理由で誘導」が19.0%と多い。

第10パターン(「抵抗時の表情」を共通ベースとして、「抵抗時の様子」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「排泄状況」、「本人の気持ち、意志」、「性格」などで構成された平均3.3項目の組み合わせ)は、「本人の行動・状態に応じて」が23.8%と多い。

第12パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」と「スタッフとの関係」を共通ベースとして、「気分」、「本人の気持ち、意志」などで構成された平均4.0項目の組み合わせ)は、「会話をしながら」が23.6%と多い。

第6パターン(「気分」を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などで構成された平均2.5項目の組み合わせ)は、「本人の行動・状態に応じて」が19.7%、「会話をしながら」が16.8%と多い。

第1パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースとして、「スタッフとの関係」、「性格」などで構成された平均1.8項目の組み合わせ)は、「移動時」が17.7%と多い。

第16パターン(「スタッフの声かけ内容・見守り方」と「本人の気持ち、意志」を共通ベースとして、「尿意・排泄感覚」、「生活習慣(ここ数年)」などで構成された平均3.7項目の組み合わせ)は、「トイレという言葉を使用しない」が17.2%と多い。(表2-9-5-4参照)

6) 絶対にやってはいけない対応

絶対にやってはいけない対応としては、有効回答255件中、「強制・命令・指示的な声かけ」が249件(97.6%)、「尿意や便意のサインを無視し放っておく」が248件(97.3%)、「失敗をしかる」が247件(96.9%)、「失敗が周囲の人にわかるような言動」が244件(95.7%)、「衣類等の汚れを見て見ぬふりして交換しない」が237件(92.9%)、「子供を扱うような言い方」が237件(92.9%)、「無理にトイレに連れて行く」が222件(87.1%)、「他利用者に聞こえるようなトイレ誘導、ことばかけ」が214件(83.9%)、「オムツ・紙パンツの安易な使用」が193件(75.7%)、「自力でトイレに行ったとき、そのまま見過ごす」が187件(73.3%)となっている。(表2-9-6-1参照)

(表2-9-1-1) 回答者の年齢

	有効回答数	24歳以下	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60歳以上
実数	265	17	39	44	31	28	21	33	37	15
パーセント	100.0	6.4	14.7	16.6	11.7	10.6	7.9	12.5	14.0	5.7

(平均年齢等)

有効回答数	平均 歳	標準偏差 歳	最小値 歳	最大値 歳
265	41.6	13.1	19	89

(表2-9-1-2) 回答者の性別割合

	有効回答数	男	女
実数	268	77	191
パーセント	100.0	28.7	71.3

(表2-9-1-3) 回答者の現在の職名

	有効回答数	ケアワーカー	相談員	ケアマネジャー	看護師	その他
実数	250	107	6	71	13	75
パーセント	100.0	42.8	2.4	28.4	5.2	30.0

(表2-9-1-4) 回答者の役職

	有効回答数	施設長	管理者	主任・リーダー	事務長	理事長	なし
実数	254	10	74	77	0	1	95
パーセント	100.0	3.9	29.1	30.3	0.0	0.4	37.4

(表2-9-1-5) 回答者の所有資格

	有効回答数	看護師(准看護師)	介護福祉士	社会福祉士	ケアマネジャー	ヘルパー	その他
実数	262	20	166	11	89	98	24
パーセント	100.0	7.6	63.4	4.2	34.0	37.4	9.2

(表2-9-1-6) 回答者の所属事業種

	有効回答数	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設(ユニット型)	認知症対応型共同生活介護事業	小規模多機能型通所介護事業	その他
実数	265	2	4	256	5	1
パーセント	100.0	0.8	1.5	96.6	1.9	0.4

(表2-9-1-7) 回答者の所属事業所での勤続年数

有効回答数	平均 年	標準偏差 年	最小値 年	最大値 年
268	3.9	2.8	0.1	19.7

(表 2-9-1-8) 回答者の総介護経験年数

有効回答数	平均年	標準偏差年	最小値年	最大値年
268	8.4	5.8	0.3	47.0

(表 2-9-2-1) 排泄誘導拒否の解決経験の有無

	有効回答数	ある	ない
実数	268	238	30
パーセント	100.0	88.8	11.2

(表 2-9-2-2) 高齢者の年齢

	解決経験のある有効回答数	74歳以下	75～79歳	80～84歳	85～89歳	90歳以上
実数	221	13	31	72	60	45
パーセント	100.0	5.9	14.0	32.6	27.1	20.4

(平均年齢等)

解決経験のある有効回答数	平均歳	標準偏差歳	最小値歳	最大値歳
221	84.3	6.2	66	103

(表 2-9-2-3) 高齢者の性別割合

	解決経験のある有効回答数	男	女
実数	235	44	191
パーセント	100.0	18.7	81.3

(表 2-9-2-4) 認知症の原因疾患

	解決経験のある有効回答数	アルツハイマー型	脳血管疾患型	前頭側頭型	混合	その他
実数	210	117	60	3	10	20
パーセント	100.0	55.7	28.6	1.4	4.8	9.5

(表 2-9-2-5) 機能障害部位

	解決経験のある人	首	上肢	下肢	体幹	無回答(=なし)
実数	238	1	2	60	5	170
パーセント	100.0	0.4	0.8	25.2	2.1	71.4

(表 2-9-2-6) 食事介助

	解決経験のある有効回答数	全介助	一部介助	自立
実数	227	4	56	167
パーセント	100.0	1.8	24.7	73.6